
光刃

~ 優 ~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光刃

【Zコード】

Z5241C

【作者名】

（優）

【あらすじ】

深い闇の中にそいつがいた。完全に葬ったはずだった。甘かった。奴はまだ……。最高位の精霊である龍を受け継ぎし少年少女の冒険の旅が始まった。

第一刃 運命

「大切なものを護る為に貴様を倒しにここまで来た。」

そこはどこまでも荒廃した大地。新世界。作られた世界。灰色の世界。生物など何もない。一人の男を除いては。

そこには純白の衣を身にまとった男と漆黒の衣を身にまとった男が対峙していた。二人とも刀剣を腰にさげていた。一人ともまばゆい輝きを放っていた。片方からはどす黒く重い光を、対照的にもう片方は神々しい輝きを放っていた。

「…………貴様の大切なもの。私から護り抜いてみよ。覚悟を見せろ、力を示せ。」

漆黒の男が言った。

「貴様が勝てば、私を殺す事が出来れば、この戦いは終わる。だが負ければ、すべてが終わる。どちらにしてもお前は何かを失なう。私が貴様に殺されることなど万に一つもないがな。己が無力であることを、勝てぬことを知つて尚私に挑んでくるとはな。」

分かつている。目の前の男が強いことを。

分かつっている。勝てる確率など皆無であることを。

分かつっている。

分かつっているんだ。

でも…それでも、負けられない。負けてはいけない。

「これ以上もう何も傷つけさせない。たとえ僕が消えようとも護

らなくてはいけないものがあるんだ。」

純白の男は刀を片手で持ち、もつ一人の男に向かた。

誓つた。友を、世界を護ると。

約束した。絶対に生きて帰つてくると。

おそらく約束は守れないだろ？

でも誓いは必ず果たす。

「……………い

くわ。」

「…レン。」

第一刃 のれき

「オイ？ 見えたか？」

「もじょうと高くしてくれ、おまけに湯気で見にくくてさ。」

「早くしろよ、俺も見たいんだから。」

一人の少年がもう一人の少年を肩に乗せている。全面大理石で出来ている巨大な風呂であった。男子風呂にはこの少年一人以外にはだれもない。なんとかギリギリ壁の高さを田の高さが超えた。

「おっ、見えたぜ！」

「オイ！ 何してんだよ。早く降りろよ。俺にも見せろってー。」

……返事がない。上のやつの足が震えている。

「どうしたんだよ？」 すると壁の向こうから声が聞こえた。

「…………レン君…………と云う君…………。何をしているのかな？」

上の少年と壁を挟んで少女がスゴい剣幕でこちらをこちらでいる。壁から顔を出せるだけの高さにいたのは水で足場を形成していたからである。

「いや…………これは…………その…………」

少女の後ろに竜のような形をした水が出来始めた。

「レーラ様が貧血や湯あたりで倒れていなか心配で……」

「何言つてんのー！」のスケベ！…」

そつ言つうのと同時に巨大になつた水の竜がレンやコウに向かつて突つ込んだ。巨大な水の固まりが津波となつて押し寄せ、それに飲み込まれつつも必死に風呂場の出口に向かつて泳いだ。苦しい状況下で一人は同じ事を考えていた。殺される。なんとか脱出し入口の扉を閉めた。助かった。

気管に水が入つたと言つてもせむるコウにレンが言つた。

「あとちよつとじだつたんだけどな」

「コレで今年に入つて4回田だぜ。」

「今まで何回覗いひとつ命を賭けたつけ？」

「ゆうに五十は超えるな。一番最初はヤバかつたな。レイラのやつ加減でいつもんを知らなかつたし。」

「やうやく、水に沈めた挙げ句に、水圧を上げやがつた。」

「あの時は死ぬかと思つたね。…」んだけ苦しんだ事だし、覗かしてくれたつていいのにな。」

「フッフッフ。」

「なんだよ？」「

「水に飲まれる直前、レイラの水で宙にじぼされた時に、見えたんだよ、胸までね。」

「テメー裏切り者！」

「まあまあ、てかそろそろ新しい方法考えねえとやべえよ。」

「そうだな。」

「だんだん水量が増してると、いい加減マジで殺されかねないぜ。」

「なんで男子風呂だけ魔法封じつかってんだよな。」

「俺らみたいなやつがいるからだよ、それに魔法で上手く見れたとしてもレイラの奴に見つかったら…………間違いなく消される」

「それもそうだな。」

アハハハハハハハハハハと二人顔を見合させて笑っていた。

第二刃 僕らと世界

ここは魔法が存在する世界。

この世界には火の国や水の国、土の国などがいくつもあり、各国にはそれぞれ他とは隔絶した超絶たる力を持つ、王族なるものがいた。

さらに、大きく古い国、例えば火の国には火竜という精霊があり、その精霊が宿りし剣、國によつて杖であつたり、斧であつたりするが、そのような武器を代々その国の王または女王が受け継いでいる。また世界には異能力者という者もいる。

例えば魔法を一切使える者がいない家系に魔法を使える者が生まれたり、またその逆であつたり。また変わつた文字通り変わつた能力を持つ者。それら、つまり突然変異の者をさす。

水の国と風の国は友好関係にあり、ヨウやレイラはよく遊ぶことがあつた。レンは物心つく前から、風の国にてヨウと同じように育てられた。

王族には体にその国特有の印があるが、レンの体にはどこにもそれがなかつた。レンはおかしいなとは思つていたが、にもそれがなかつた。レンはおかしいなとは思つっていたが、誰に聞いても決して自分の過去を教えてくれようとはしなかつた。

レンがはじめて使つた魔法は雷の魔法であつた。

その時風の国の中であるシユナイザが一度と使うなといい、レンの体に魔法をかけた。莫大な魔力を使つた封印魔法であつた。

しかしレンは一人で再び魔法を使ってみたら、なんの影響もなく普

通に使うことができた。ヨウとレイラ以外の人の前では一度も使わなかつた。バレたらどれほど怒られるかもわからない。

その者が使う魔法の特性は生まれで決まる。異能者といって、一族と関係のある力を持つ。例外はない……はずだ。

もしかしたらと思い、雷の国があるのかと調べるため、古い文献を紐解いてみたのだが、何一つ関係する事柄すら見つからなかつた。

唯一自分の過去に繋がる可能性も失い、自分の正体に悩んだ時もあつた。

しかし今はヨウやレイラ一人と楽しく暮らしているので、そんなことは考えなくなつていた。無意識のうちに考えることを避けていた。

第四刃 迫り来る闇

「「J...」」めぐなさい」

苦しい。まだ怒っているらしい。いい加減許してくれてもいいだろう。

風呂からあがつた俺らはレイラに会わないうちに風の国の宮殿から抜け出そうとした。風の国と水の国はとても近く、いつもどちらかの国に集まつてあそんでいたのだ。一人の逃走劇に話を戻すが、ヨウの力で少しなら空も飛べたが、それではすぐに見つかってしまう可能性があつたため、城の抜け道を通りたのだが、レイラのやつが魔法をすでに仕掛けて、見事にそれにはまってしまった。

それは箱のような水の塊であった。あいつ俺らの逃げ道を把握しているらしい、最近は逃げ切れた試しがない。これも水以外の魔法を封じる魔法封じが施されており逃げようがない。一人とも泳ぎは得意だが、魔法のせいで体がうまく動かせない。酸素が…ヤバい…死ぬと思っていたら、レイラが水の檻の前に来て、どうしたの?って笑顔で言つた。…Jの女…マジで殺す気だ…

「がぼつがぼがぼがぼがぼ!（本当にすいませんでした！）」

ヨウが水の中でなんとか土下座しながら言つた。

「がぼがぼがぼがぼがぼが。（もう一度としないので許してください。）がぼがぼがぼがぼがぼがぼ。（マジで死んじゃうって。お願ひだから助けて。）」レンも謝る。

「なんて言つてるか全然分かんないよお。ちやんと言わなきや。

『『じめんなさい、とつてもかわいいレイラ様。レイラ様の美貌を見たくてついやつてしましました。もう一度といふのは致しません。お詫びに一生あなた様のしもべにさせてください。』』つてね。』

この女あー調子にのりやがつてーとは思いつつもさすがに苦しい。二人とも必死に、

「がぼがぼがぼがぼがぼがぼ……」ヤバいマジで息が…

「そろそろ許してやるか。」そつこつとレイラは指を鳴らした。

『パチン』といつ音と共に水の檻の形がくずれ、あたりは水浸しこなった。

「どう?少しば憲りた?」

「はー…………な訳ねーだらー。」レンはそつ音でレイラと反対の方にヨウと一緒に駆け出した。

「隙ありー!」

ヨウがレイラのスカートを風の魔法で完全にめくりあげた。

「キヤーー!何すんのよー!」急いで手で押されたが遅かった。

「ピンクのパンツが見えた!」ヨウが走りながらガツツポーズをする。

「レイラちゃん、かわいいー。」レンも走りながら言つ。

「もう絶対に許さないんだからー！」

この時すでに始まっていたんだ。

同時刻 ある国の山中

黒い影が2つ…

「あーあ、だりーなあ。」 人らしからぬ形をした者が最初に口を開いた。

「まあそういうな。」 もう一人は人のよつた形をしている。

「風の国だけ？」

「ああ、そうだ。」

「即行で殺して、奪い取れば良いじゃないか？……なあ、レルガ？」

「それでは意味がないんだよ。

「なんでだよ。」

「まあ直にわかるさ。」

「つたくムカつくな～お前は。」

『ガアアアアアアアツ』。突然木々をなぎ倒し、体長10メートルはあるうかという恐竜のような怪物が現れた。背中から巨大な人の腕のようなものが生えている。

「うつせんだよ。」そう言い終わる前に、目の前にいたはずのそれは肉片になっていた。

「もう少しで着ぐ。」

「はあー疲れた。」

ここは風の国のある北西にある平原。三人は並んで平原に寝そべっていた。やわらかな日差しが彼らを照らしていた。心地よい風が彼らを頬をなでる。

「こつまでもいひてこられたらここのにな。」

「やうだな。三人でずっと……」

「何、年寄りみたいな事言つてんのよ。いつだつて来れるじゃないの。」

「でも老けたレイラは見たくないな。……な、兀。」

「やうだな。こつまでもかわい……つて何言わすんだよー。兀の顔が赤くなる。」

「こつまでもかわい…………何？」レイラも少し顔が赤くなっている。

「か、かわいくねー女のままだろ。つて言おうとしたんだよ。」

「おやおや、兀。顔が赤いよ。ホントはなんて言おうとしたのかな？」レンは楽しそうにからかっている。

「やう照れるなつて。…………誰だ？」やうこつ

て上半身を起こして、腰こしげていた愛刀「白刀」の柄に手をかけた。を着ており杖を右手に持っていた。

「何言つてんだよ？」兀が不思議そうに聞く。

急に目の前が光り、突然男が現れた。見たこともないような白い服を着ており杖を右手に持っていた。

「驚かしてすまない。訳あつてこつまへ来なければならなかつたんだ。」

「何者ですか？」レンが鋭い目で睨みながら聞く。

「怪しい者じゃないといつても信じてくれないだらうから、怪しい者でいいよ。伝えなければならぬことがあるってね。よく見るとその男、どこかどこかに傷を負っている。」

「レン君… ところのかな君は。腰にさしている剣、白刃を完全に解放できるようになつてはいけない。」

「なぜ知つている？ それになぜ解放を止める？』

「理由を言つてる時間はない。あと、王に伝えてくれ。闇が…迫る… と。」

「今すぐ王宮に向かつて走れ。』

「は？』

「早く…やつらが来る前に。』

「分かった。行くぞ！ 早く！」レンは一人を連れて走り出した。』

「オイ…どうなってんだよ。なんでもよく分からぬあいつの言つことを聞く？』

「ヨウ君感じなかつた？ 妙な力が一つだんだんと近づいてくるのがなり力を抑えていたみたいだけど、重く、どす黒い魔力が溢れ出てた。あの人は、よく分からぬけど悪い人には見えないの。』

平原をぬけた時に、三人の足が止まつた。またといふよつ止めら

れたという方が正しいのかもしれない。なぜか足だけではなく体がピクリとも動かない。

「そんなに急いでどこに行くんだ？」

第五刃 旅立ち

目の前の景色が揺れた。そして空間が裂け、そこから一人の男が現れた。

『ビリビリッ』

空気が魔力で震えている。

息が苦しい。体中が重い。押しつぶされそうだ。震えが止まらない。立っているだけで精一杯だ。怖い…怖い…

「君がレンと言つ者か？」
男の声がした。

「私達の魔力を受けて体が上手く動かないか。まあいい。」

逃げないとヤバい。どうすればいいんだ。ヨウやレイラも動けないか。もし動けたとしても、逃げ切れはしないだろうが。

「先ほどの男に何を言われたか知らないが、忘れた方がいい。そのかわり面白い事を教えてやろう。」

そいつは続けた。

「お前の持っている剣には龍が封印されている。それもその二人の継ぎし水龍や風龍などとは比べものにならない力を秘めたな。それにお前は魔法が上手く発動できないだろう。魔力もその二人の足元にも及ばないはずだ。なぜか…それはお前が無力だからではな

一部の者が剣に、そしてお前に封印を施したからだ。」

何を言つてゐるんだ?」——「いつは……封印……だと? 確かに雷の魔法を使つた事があるが、封印したというなら完全に使えないはず。

その男が右手をレンに向けた。

何をする気だ、こいつ

目を開き、
口を開いて訳の分からなし呴文のよこなのを呴いたあと
男は再び

君を呪縛から解き放つてあげよう。」

そう言った瞬間、手から出たどす黒い光がレンの体を包んだ。

レンの体中に激痛がはしる。

「今は分からぬだらうが、だんだん君は本来のあるべき姿に戻つていくだらう。」

光が消えるとともに、レンに向けてた手を下ろした。体中をはしる激痛も同時に消えた。

「君は本来、こちら側にいるべき者だ……来たか。」

烈爪

『ザザザザンツ！』

一瞬で先ほどまで男達がいたところの地面が真っ一つに裂けている。男達はいつの間にか後ろにさがっていた。

「お前たちはさがつていろ。」

男達と俺らの間に突然現れたのはシユナイザ様だった。

こんなシユナイザ様見たことない。なんて魔力だ。体中から魔力が溢れ出るのがわかる。しかしそれはとても温かい気がした。

「コイツ、殺していいか？」男の一人が口を開いた。

「その必要はない。

それにお前では今は無理だ。例の者たちの一人だぞ。すべき事は終えた。帰るぞ。』

「逃げる気か？』

シユナイザが問う。

「ガキを三人守りながら、俺らの相手をして勝てるとしても思つていいのか？』

そういうて手を上にあげると、手のひらの中に黒い塊ができた。

「待て！』

シユナイザがそう言い終わる前に一人は黒い光に包まれて消えてい

つた。

奴らは去つたが、レンもワウもレイラも固まっていた。

：白い服を着た男

：一人の男

：剣の封印

訳が分からぬ事ばかりだつた。

俺は何者だ？レンは自分の正体から今まで逃げ回つていた。知るところが怖かつた。踏み出す勇気がなかつた。答えてくれないならそれでいい、その方がいいと、心の中で思つていたのかもしれない。

今度は自分から踏み出してみよ。レンは口を開いた。

「シユナイザ様。あの……」

その言葉を遮るよひに、

「あとで話そう、レン。みんな疲れたろ。ひとまず城に戻ろ。」

そこにはいつも優しそうなシユナイザがいた。

4人は城に向かつて歩き出した。

4人は風の国の城に帰つてきた。

「……レン君。後悔するかもしれないが、それでも聞きたいか？」

最初に口を開いたのはシユナイザだった。

「はい。逃げないつて決めましたから。」

「わかった。……………君は今は無き、雷の国の一族の王族の者だ。」

シユナイザは続けた。

「雷の国は昔、千年前の大戦より前にはまだ存在していた。とてつもない力を持つた国だった。そのために、自分自身の力に呑まれやすかつたのかもしぬない。」

「そして闇に墮ちた。ある者……魔帝と呼ばれた者を指導者とし、世界を壊そうとしたのだ。しかし闇に墮ちなかつた者が一人だけいた。その者の名はティーガ。後の大戦で、人類を勝利に導いた者だ。その命と引き替えに……。」

「彼と他の国々によつて雷の国はこの世から消え去つた。雷の国の

民は皆殺しにされた。一度完全に闇に墮ちた者はもとに戻ることができないからだ。しかし雷の国の者がもう一人生き残っていたんだ。そいつはのちの大戦を引き起こした者だ。多くの者達が死んだ。子供も、大人も、老人も、みんなだ。」

「よつて雷の国はすべての人々の心に深い傷を負わせて、記憶の隅に封印された。書物にもかかれることのないものとなつたのだ。」

…僕の体にはそんな一族の血が流れている。人々を苦しめ、殺した者達と同じ血が。

レンは啞然とした。無理もない。事実がそうさせるものであるのだから。

そんなレンを見てシユナイザが言った。

「確かに君は雷の一族の者だが、その体には父である英雄ティーガの血が流れている。だが、そんな君を危険だと言う者たちがいた。父親は英雄であるがまた一族の血がその子を悪魔に戻すかもしれない。だから殺せと。

もちろんそれを私は止めた。親友であるティーガの頼みでもあつたから。剣と君への封印、そして私が見ているのを条件として、なんとか君を守れた。」

ヨウやレイラは必死にレンに何か話そつと考えていたが、かけてあげられる言葉はなかつた。

「僕の存在がいつか周りを傷つけるかもしれないのか…」

レンが震えた声で言った。

するとシユナイザがレンの頭を撫でながら「コッ」と笑って、
君はそんなこと一度もしなかったし、これからもそんなことしない
のはわかっている。だからアカのレイラちゃんの友達になつてそば
にいてもらつた。」

頭を撫でていると、レンの手の平に皿がいつた。

「レン君ーその皿をどうぞー!？」

急に大声になつて聞いた。

「さつきの奴らの一人に何かされたのですが。」

シユナイザは急に険しい顔になり、

「その呪いはね、雷族に伝わる禁術なんだ。過去に数人が使つた呪
いでね、
放つておくといづれ君が君でなくなつてしまつ。」

レイラが驚いた顔をして口を開いた。

「レンがレンでなくなるって、どうこうですか?」

「心の闇を解放する呪いでね。心を強くもつていないと闇に呑まれ
てしま。」

「どうしたら解けるの?」

『ウが聞く。

「術をかけた者を殺さなくてはその呪いは解けない。しかし先ほどの二人のうちの一人ではない、どんな魔法を使つたかは知らないが、その者を媒介とし呪いをかけた奴がいる。」

「誰なんですか？」

今度はレイラが聞いた。

「魔帝だ。その魔法を使えるのは現在魔帝しかいない……はずだ。」

「殺したはずでは？」

「そうだ。葬り去つたはずだ。しかしそれが葬り去つた気がしてただけで何らかの方法で生き長らえ、禁術を使い、蘇つたか……最近世界各地で悪魔が増えてきているのもしかしたら奴のせいかもしだぬ。」

「僕が死ねば誰も傷つく心配もないんだね。」

レンが重い口を開いた。

「何言つてんだよ。俺の親友は人を傷つけるような奴じやない。俺が一番わかってる。」

「そうよ。例えレン君が雷の一族だとしても、レン君はレン君よ。」

「もし一人を傷つけるよつなことがあつたら……俺……」

「大丈夫だつて。殴つてでも、
田を覚まさせてやるや。」

「殴らなくてもいいじゃない。」

「例えばの話だよ。」

……しばらく黙つてからレンが言つた。

「ありがと。…………俺は雷の一族の一人として、魔帝を倒して
くる。完全に復活してまた世界を壊しにくる前に。自分を流れる血
の束縛から逃れるために。」

「さて、そうと決まれば、行くか。魔帝退治に。」

と、三ウガ言つた。

「何言つてんだよ。俺のためにお前が命を懸ける理由はない。お前
まで危険にわざわざわけにはいかない。」

レイラも一度田を開じて、またゆっくりと開き、

「そうね、行きましょうか。」

「レイラも向言つてんだよ。」

「言つたでしょ。三人で、ずっと…………一緒につて。あなたが何
と言おうと、離れないんだからー！」

ヨウが一やつきながら、言った。

「何それ？告白？良かつたなレン、一生あなたについて行きますだつて。結婚式は帰ってきてから挙げるか？」

「な……ち、ちがつ、ばか！」

顔が真っ赤になり頭から湯気が出ている。

レンも赤面する。

「そういうわけだ、レン君。君は一人じゃない。仲間がいる。何よりも代え難い仲間が。ヨウもレイラちゃんも君の苦しみを背負つてあげようとしている。一人で背負い込むもんじやない。君はそんなに丈夫じゃない。人は誰しも一人で生きていけるほど丈夫じやないんだ。だから仲間が、友がいる。無理をする必要なんかないんだ。君は幸せなんだ。君のことをこんなにも大切に想つてくれている友がいる。一人を信じてみてはどうだい。」

「……はい。ヨウ。レイラ。…………ありがとう……。」

レンの目から涙が一粒頬を伝つてながれた。

「俺ら、親友だろ？一緒にレイラに苦しめられてきた。」

ヨウがレンに笑いかけた。

「失礼ね。二人があ……をの……」つとしたからじやない。
レン君。私たち、仲間だよ。」

シユナイザは一人の言葉を聞いて笑っていたが、眞面目な顔にもどり、

「では、魔帝がいるであろう場所までの道を教えよう。奴の居場所に行くには、いくつかね封印を解かねばならない。封印を完全に解き、解放できるようになつた白刀を使わないと奴の居場所への道は開かれない。白刀に宿る龍の力は五つの強力な玉に分けて封じてある。君の力もその玉の中だ。」

「その玉はどこにあるのですか？」

ヨウが聞いた。

「風、水の国を除いた、世界の五つの国にある。しかし私が取りに行くことは出来ない。君を助けるためにした約束を破る事になるからだ。頼んでも渡してくれないだろう。それに今はあまり交流がない国々だから、どうなつてているのかもよく分からぬ。道のりが書かれた地図を渡そう。」

「ありがとうございます。」

「すまない、私が今できるのはこのくらいしかないんだ。」

「十分です。」

「あと、一つ言つておぐが、もし魔帝が本当に生きていたら、知らせてくれ。さすがに奴が相手では無理だらつ。」

「分かりました。では行つてきますー。」

「待つんだ。今出では外は危険だ。明日の早朝に出発しなさい。」

「最後に、一つ。重要な事だ。」

そういうてシユナイザはレンの手に白い布を巻いた。

「この印は決して見られるな。それと人前で雷の術を使うな。」

「何でそれを？」

「君が封印を施された、使うなと私が言つた翌日に使つた時から知つていた。」

レンは下を向いた。

「バレてたんですか…」

「そんなことはいい。城の外では極力使うなよ。人には絶対に見られるな。雷の力を利用しようと考へてる者は世界中にはいる。いや、いたというべきだな。雷は恐怖の象徴であると同時に、力の象徴だからな。それに君の存在は隠されている。公にはなつていない。知られたら必ず狙われる事になる。全ての封印を解き、力を自分のものに出来るまで封印するんだ。そうすれば君は自分を、友を、そして世界を傷つけようとする者から護ることが出来るようになる。それまでは…。それに君を城。それと人前で雷の術を使うな。」

「何でそれを？」

「君が封印を施された、使うなと私が言つた翌日に使つた時から知つていた。」

レンは下を向いた。

「バレてたんですか…」

「そんなことはいい。城の外では極力使うなよ。人には絶対に見られるな。雷の力を利用しようと考へてる者は世界中でいる。いや、いたというべきだな。雷は恐怖の象徴であると同時に、力の象徴だからな。それに君の存在は隠されている。公になつていらない。知られたら必ず狙われる事になる。全ての封印を解き、力を自分のものに出来るまで封印するんだ。そうすれば君は自分を、友を、そして世界を傷つけようとする者から護ることが出来るようになる。それまでは…。それに君を城の外に出したとバレたら国としてマズいことになる。」

「力を封印…か。」

たとえ僕が狙われ、殺されようがヨウとレイラは必ず護る。

そう誓つたんだ。必ず護ると。でもその時はまだ知らなかつたんだ。世界の闇を。己の無力さを。そして、運命を。

翌朝　出発の日

まだ太陽も出ていない時間にレンとヨウとレイラは国を背に歩き始めた。

城の最上階で窓から三人を見つめる男が一人。

「ティーガ。あの頃を思い出すな。」

空に向かってそう言った後、彼らの方を見て言った。

「必ず帰つて来いよ。」

三人の旅が始まった

第六刃 鬼

「迷つたな。」

「迷つたわね。」

「ああ。完全に迷つた。」

風の国を出た三人は、最初の国 砂の国に向かっていた。途中にある、鬼の森の中にいた。

「まだ昼なのに暗いな。さすが鬼の森だな。木々までバカでかい。」

周りの木々はゆうに数十メートルに達し、日の光がほとんど差し込まない。それにこの生物は異常な成長をする。草木も動物も……

「どうしようか？今までまだ悪魔に会つてないけど、夜に出でたら、圧倒的に不利だ。ただでさえこんな森の中なのに。」

座りやすそうな木に腰を下ろし、レンが言った。

「今日中に出られそうもないし、なるべく安全な場所を探して、そこで隠れて、また明日出発しましょ。」

近くの木に残りの一人とも座った。

「やつだな。この森ヤバいのがいるらしく。」

「じゃあ、手にわかれましょ。レンとヨウが一緒に私が一人で。」

「何言つてんだよ。女一人で行かせられるかよ。」

ヨウが言つた。

「いいの。ヨウと行つたら悪魔に襲われるのより早く襲われるかも
しないし。レンも上手く魔法使えないし。」

「なんことしねーよ！」

「ははは。まあいいじゃん。レイラそれでいいよ。でも気をつけや。」

」

レンが笑つて言つた。

「ありがとう。レン。それじゃ、日没前にまたここに。」

レイラは森の中を歩いていった。

「たく、あの女。せっかく人が心配してるつていうの。」

「まあそんなに怒るなって。それじゃあ、僕たちも行こうか。」

二人はレイラと反対方向に歩き出した。

「なあヨウ。お前、剣に宿る龍にあつた」とあるか？」

しばらく歩いていると、レンがヨウに話しかけた。

「風龍にか？あるよ。一回。初めて剣を授かった時と國の外にレンと抜け出して悪魔に殺されかけた時。」

……一回目の時、覚えてるか？レンも見たる。巨大な風の斬撃。あれは俺がやつたんじゃない。俺に死なれては困ると、風龍が守つてくれたんだ。

「そうだったんだ。」

「あれ以来、力の解放の初期段階である、《解》が出来るようになつた。けど、まだそれだけだ。」

「次の段階である《牙解》に至るためには、いつでも風龍と対話出来るようにならないといけないらしい。そのためには龍に認められないと。」

ヨウはヨウの剣「風刃」を鞘から抜き、刀身を見ながら言った。

「さてそろそろ戻るか。」

『ズシーン、ズシーン、ズシーン！』

「何か来たな、それも相当でかい。ひとまず隠れよう。」

二人は木の上に登つた。

木々の間から出てきたのは、巨大な鬼だつた。体が赤黒い。持つているのは、話によくある金棒ではなく、これまた巨大な剣だつた。周りに小さな、それでも人間位の大きさの鬼を引き連れて。

「ヤバい。レイラのいる方に向かつてる。どうする？レン。」

「ひとまず奴らより早くレイラの元に戻ろう。」

二人は鬼達に気付かれないように、木をおりて、少し距離をとつて駆け出した。音をたてないように、それでも早く走るのは難しかつた。

「レイラの魔力…」

「俺も感じた。あいつ戦つてんな。あの鬼がきたらまずい事になる。」

「なんとか鬼より早く行けそうだ。」

レイラの魔力を感じる方へ二人は走つていた。

ようやくレイラを見つけたが、レイラは球体状の水のシールドをはつて、その中にいた。それを壊そうとする鬼が十数体。

「あの数なら殺れる。」

「レイラ救出と行きますか。」

「いいぞヨウ。あの巨大なのが来る前に。」

「

二人は隠れていた木から飛び出した。

「風刃、《解》」

剣が風を帯びて、光る。その光が消える頃には、一体が真っ二つになっていた。

「風刃　一雙龍一」

一本の剣が最初より少し短く、

そして風を帯びた二刀に変化した。

鬼達がこちらに気付き、襲つてくる。

居合：『烈閃』

目の前に迫る一体をレンが高速の斬撃で斬り捨てる。

殴りかかり、ひっかいてくる鬼達の攻撃を右へ、左へとかわしながら、一体ずつ斬つていく。

《ズシーン、ズシーン》

「あの足音だ、もう来やがった。レンーさがれ！一気に殺る。」

ヨウが剣を一本を鞘の位置に、もう一本を反対側に腕をクロスさせる。

体中を風が包む。

殲塵

クロスさせた腕を元に戻しながら、魔力を剣に集中し圧縮して飛ばす。その際周りの風が乱れ、巻き込まれて、無数の斬撃を生じさせる。

ヨウの前方は無数の風によつて残りの鬼も木々もバラバラになつた。鬼の血が辺りを真つ赤に染める。

卷之三

ヨウの声と共に三人は走り出した。

しかし、一人についてきてはいるが、レイラがまだ水の球体から出て来ない。

「そんな邪魔なもん解けって。早く隠れないと。」

「いいの！ これで！」

「いいわけないだろ！無駄に力使うなって！」

走っていると、洞窟を見つけることができた。

「あそこに隠れよう。」

三人は中に入つていった。レンは入口に残り、そして鞘を入口の地面に刺して魔力を込めた。

魔術『魔封術－白－』

『ズシーン、ズシーン…………』

「…………行つたか？」

「ああ。」

ミウの間にレンが答える。

「そろそろレイラも魔法解いたら。奴らもいつたし。」

「いいの……」

「……しようがないなあ、もう。」

レンは球体の中に腕を突っ込んでレイラを引っ張り出した。

「キャッ！」

水の球体から出てきたのは、裸のレイラだった。

「あ…………。」

「バカ…………」

腕を掴んだレンの手を叩き、 ものすごいビンタを食らわしてすぐ近くの球体の中に戻った。

「…すみません。」

レンは球体の前で土下座して謝った。右の頬がはれてる。少し涙田だ。よっぽど強烈な平手打ちだったのだろう。

「まあ、許してやれよ。レイラ。悪気があった訳じゃないんだし。そもそも何で裸なの?」

「…………歩いて少し汗かいてたから、川で水浴びしてたら、急に襲つて来られて……。」

「いやーしかしいいもん見せてもらつたなあ。なあ?レン。」

「やめてよ。怒るわよ。」

「[冗談]、[冗談]。服返してやるから怒るなって。」

「はい?」

「だから服返してやるから。」

「え…………?」

「なんか服が落ちたから、逃げる時に一緒に持ってきたんだよ。」

「…」とは私が…なの知つてたのよね?」

「 もうねえ。」

「 許せない！！」

球体から水でできた大きな手が出来て服を取り返そうとするが、三
ウが服を抱えたまま、避ける。

「 返して欲しかつたら、その中から出でて来きなよ。」

「 いいわよ。」

そつこいつとレイラが球体から裸のままで出て來た。そのまま三ウの
目の前まで歩いてきた。

「 レ…レイラ…」

「 隙あり。」

後ろから水の手に両足を掴まれた。目の前にいたはずのレイラは消
えていた。

「 残念ね。蜃氣楼の応用魔法、幻水。どう? 本物の私みたいだった
でしょ。」

「 きたねーぞー。」

両足を掴まれ逆戻りになつて三ウが詰つた。

「 もーで三ウ君。覚悟はこい?」

球体の中で服を着たレイラが歩いてきた。

「「めんなさい……ああああ！」

二人がそんなことをしているなか、レンは地面から鞘を抜き、洞窟の外に出でていた。

あの鬼。最初から俺らに気づいてやがる。初めて見た時じゃない。それより前。森に入つた時から分かつてやがつた。俺が洞窟に張つた結界も見破られてたな。なぜ気づかないふりをしてたんだろ？……

この森を奴をうまく撒いて出るのは不可能だな。俺らで奴を倒せるか……

「レン君ー。もひ寝よつよ。」

「俺は見張りをするからまだいいよ。」

「いって。ヨウが見張りをするから。一緒に寝よつ。」

「い、一緒に寝る？」

「そ、そんな意味じゃないよー。」

戻ると辺りは水浸しになつていて、所々に血が…

何があつたのかは知りたくない。

ヨウがボロボロの格好で入口に行つた。通り過ぎ様に、

「人の皮をかぶつた鬼だ。」

と言っていた。ふざけるのもまじめでせねえ……

レイラは一番奥で葉っぱを敷いて寝た。俺はその少し手前に寝ていた。寝たと言つても仮眠で、数時間後に戻りと代わるために、入口に行つた。

「起きてたのか？」

「いや少し寝させてもらつたさ。」

木々のすき間から月明かりが差し込む。

「見張り代わるつか？ 明日は鬼と殺り合ひになるとさ。」

「分かつてゐるさ。いいよ。レイラにも言われたし。もう少し月を眺めていたいんだ。」

「お前強いな。十数体もの鬼を一撃で。」

「全然ダメさ。父親から習つたあの技は目標を塵のように消しちつて初めて完成なんだ。アレでは強い奴にはたいしたダメージにならない。ましてやあの巨大な鬼にはな。」

「どうやって倒す？」

「どうにかするしかないな。」

「俺にも力があれば……。」

「十分強いよ。剣も魔力も封じられてるの！」

「アカやレイラの足元にも及ばないのは事実だ。足手まとこになつてしまつ。」

「ならなじや。いずれ力を取り戻した時に助けてくれればいい。お互こわあれ。足りないとこを補い合つ。それでいいんだよ。」

「すまないな。」

「なあに。気にすんなつて。それと今度レイラに殺されかけた時に助けてくれればいいや。」

「ははははは。あんまりやつすきんなよ。かばいきれないからな。」

「分かつてゐ。もう寝ろよ。少し剣と対話してみよつかなと思つてさ。今日は代わらなくていいよ。それに明日の朝に俺がやつてなかつたら、またレイラに怒られる。」

「すまないな。お休み。また明日な。」

レンは洞窟に戻つて行つた。レイラの寝ている少し前まで来て止まり、座つた。

どうしたら強くなれる？明日鬼を倒すための力。白刀を鞘から抜き、刀身を見つめて言つた。

「教えてくれよ。雷龍…」

第七刃 閉じゆく道

「おはよう。レン君。」

目を開くと目の前にレイラの顔があった。

「わっ…お、おはよう。」

「遅いぞ。」

ヨウが壁に寄りかかってた。

「悪い。夢をみててな。」

「どんな夢だったの?」

「秘密だ。」

「誰かが俺を呼んでいた。深い深い暗闇から。何度も何度も。誰だつたんだろう…

「人に言えないような夢を見るなんて。レイラの体はレンには刺激が強すぎたな。」

「そんなんじゃねーよー。」

三人は出発の準備をした。今日中には森を出たい。

「よし。行くか。」

「ヨウ。方角分かつてんのか？無駄に歩き回つて消耗したら、鬼に間違いなくやられるぞ。」

「大丈夫。夜のうちに確認しといたから。方角も現在地もバツチリだぜ。」

血饅頭に言った。

「行きましようか。」

三人は洞窟を出た。森の東から入つて来て西ぬける予定が、南の方に來ていたのだ。三人は北西の方向に歩き出した。

やはり暗い。夜も朝もあまり変わらないようだ。進んでも進んでも同じ景色が続いた。

「…おかしい。」

レンが口を開いた。

「ええ、そうね。」

「何が？」

「鬼がない。それに静かすぎる。」

あれだけ鬼を斬つたんだ。来るであろう場所は見張つておくはず。

それが気配すらしない。

「ナニこやうだな。」

嫌な感じがする。洞窟を出た時から少し違和感は感じていたのだが。

「コウ、ちょっと飛んで周りを見てみてくれないか？」

「ああ。」

そう言つてコウは風の翼をつくり、飛んでいった。

「嘘だろ…………？」

空が真っ赤だ。さっきまでは木々で見えなかつたが血のよつた赤色だ。

翼が空氣に溶けるよつて消えた。

「あれ？」

「あああああああー。」

「危ないー。」

レイラがとつそこに水のクッシュョンを作った。

『バッシューンー。』

水のクッシュョンもコウの重さに耐えきれず、落ちた瞬間に破裂した。

「いつてー。まだ怒つてんのかよ。」

「違うわ。なんか力がでなくて…」

空が赤い……
力がない……
…

そうか！

「ヤバい！戻るぞ。」

レンが走り出した。

「やられた。時空間魔術で洞窟一帯(＼＼＼＼＼)、異界に(＼＼＼＼＼)させられてたんだ。

＼

「戻れるのか？」

「あの洞窟のあたりに魔法陣があるはずだ。もしくは元の世界と繋がる空間の歪みが、前者の場合、反対魔法を使えばよし。後者の場合、歪みを魔力で広げるしかない。」

「ならレイラなら魔法陣とか得意だし、なんとかなるな。」

「そもそも簡単にいかない。この異界を作ったやつは魔力がだんだん失われていく魔術を附加した。歪みを広げる程の魔力が残っているが、それ以前に歪みはだんだん消えていくから、それに間に合つか。」

「まづいわね」

「異界から出れたとして、こんなものを創り出せるやつを減った魔力で倒せるか…………？」

「もういい。ひとまず脱出だけを考えよつ。急げ」

「見つけた！！」

レイラが洞窟の外側に空間の歪みを見つけた。だいぶ小さい。直径三十センチメートル位の円の大きさだ。

「これを洞窟一帯を包むくらいで広げなくてはならない。魔力を用いた攻撃で衝撃を貰えると、なかに吸い込まれ、元の世界に出てこられる。しかし小さいとの異界と僕らの世界の狭間に取り残されることになる。」

「いいぜ。やつてやあひじやん。ビツセナツするしか戻る方法はないんだろ？」

ヨウが剣を抜いた。

「私の力みせてあげる。」

レイラも剣をぬぐ。

レイラの剣は名を「優霊」^{ゆうれい}と云う。

龍の涙から出来たといわれる、水分で形成されている剣だ。刃は青みがかつており美しく、そして鋭い。水分から成っているとはいっても、相当な強度をもつていてる。

「風刃…」

「優雫…」

「《解》！…」

二人が同時に叫んだ。

「風刃　一雙龍一　」

「優雫　一零一　」

風刃は一本に、そして優雫は丸い水の玉になった。見ていると中に吸い込まれそうになるような美しい玉だ。

「レイラの解放初めて見たがそんな形してんだな。」

「弱そうだなとか思つてるんでしょ…。」

レイラは頬を膨らましてヨウを少し睨んだ。

「強いんだからねー…」

「そんなこと言い合つてる暇ないぞ。時間が無い。」

二人を止めてレンが言った。

「正確な位置への同時斬撃。やるぞ。」

三つは、両足で地面をじっかりと踏みしめ、両腕をクロスさせた。レイラは両腕を高くあげて伸ばしきり、両手を空に向けて広げた。その手の平に優秀をのせて。

レンは刀を鞘に戻し、柄から右手を離した。そして目を閉じる。左手は鞘をつかみ、腕は軽く曲げて柄の前に構える。

「こべぞー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5241c/>

光刃

2010年10月14日01時43分発行